

これからの[DREAM]

進路指導部主事

これまで岡崎盲学校の進路情報については、主に学校ブログや進路相談、また本誌[DREAM]を通して皆さんにお伝えしてきましたが、今年度3学期からの学校ブログ一時休止に伴い、再開するまでは[DREAM]の発行回数を増やし、紙面



配布とメール配信という形で必要な情報を発信していきたいと考えています。

本誌のタイトルであるDREAMという単語を英和辞典で調べてみると、『夢』や『理想』という言葉が出てきます。しかし、ここでは耳触りが良いだけの夢の話や、外面的な理想を語るの

ではなく、視覚障がい者の進路を取り巻く状況を正しく伝え、そのうえで「夢を叶えるための心構えや行動」、「視覚障がいのある当事者としての悩みや喜び」、また「進路指導に携わる教員の想い」…等についてお伝えしていきたいと思ひます。

今号では最初に、希望の進路実現のために大切な『家庭学習』の重要性について、過去に配信したブログ記事から抜粋、また新たな情報を加筆して紹介しします。

なお、これまで配信されたブログ記事については今後も閲覧することができますので、特に視覚支援に理解のある福祉施設や治療院、大学などの情報について、進路先の検討としてぜひご活用ください。



岡盲公式ブログ

【小さなコツコツが、大きな力に】



高等部のある女子生徒は、家庭学習の一つとして寄宿舍で折り紙をしています。主に指先の感覚を使って1枚の紙からツルを折り上げます。1年以上前から毎日コツコツと作り続け、精度やスピードが見違えるほど大きく向上しました。

この女子生徒は、学生最後の校外実習で、態度面と共に指先の器用さについて特に評価されました。このことは学校で行う作業学習に加え、家庭学習で身につけた力も大きく寄与していると感じています。製造業を目指す彼女にとって、指先の器用さはとても大きな強みになっています。



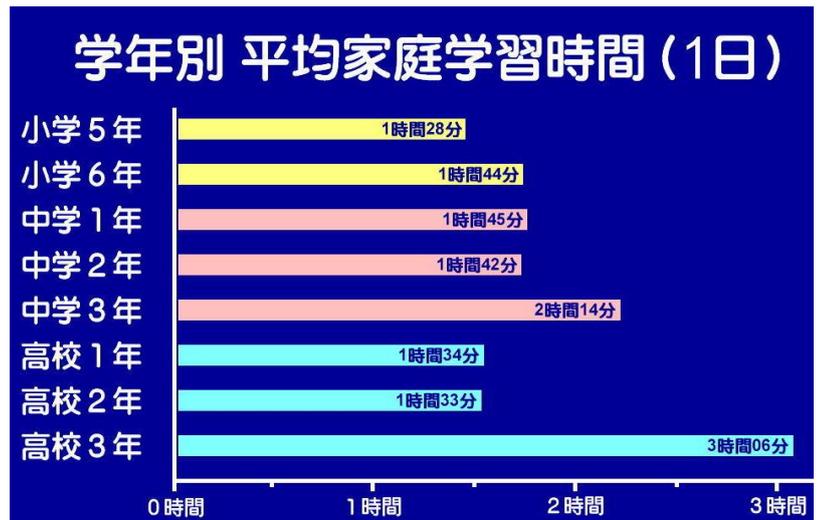
個別の進路相談をしていると、「宿題以外に家庭で行う学習がなく困っている」という話を保護者の方から聞くことがあります。しかし各々の進路希望や目標につながる学習は日常生活の中にもたくさんあります。例えば部屋の掃除や洗濯、小売店での買いものや食事作り、歩行練習や公共交通機関の乗車練習、パソコンのタイピング練習、また目標に沿っていれば彼女のような物作りでもよいと思います。そして、当然ですが授業の予習・復習も大切な家庭学習です。

ほとんどの学習は、少しの時間でも繰り返し行うことで大きな力になります。「希望する福祉施設や企業で働きたい」、「国家資格試験や大学入学試験に合格したい」、「将来はグループホームで暮らしたい」など、その目標につながる行動を日常的に続けられるかどうかで達成の成否を分けます。中学部になってから、高等部になってから…ではなく、今できる家庭学習をコツコツと積み重ねていきましょう。

【家庭での学習時間】

全国最大規模の校外模擬試験を実施している[ベネッセコーポレーション]が、[東京大学]と共同で家庭学習時間の全国調査を行いました。これによると、学校の授業を除く1日の学年別平均学習時間は…

- 小学5年生：1時間28分
- 小学6年生：1時間44分
- 中学1年生：1時間45分
- 中学2年生：1時間42分
- 中学3年生：2時間14分
- 高校1年生：1時間34分
- 高校2年生：1時間33分
- 高校3年生：3時間06分



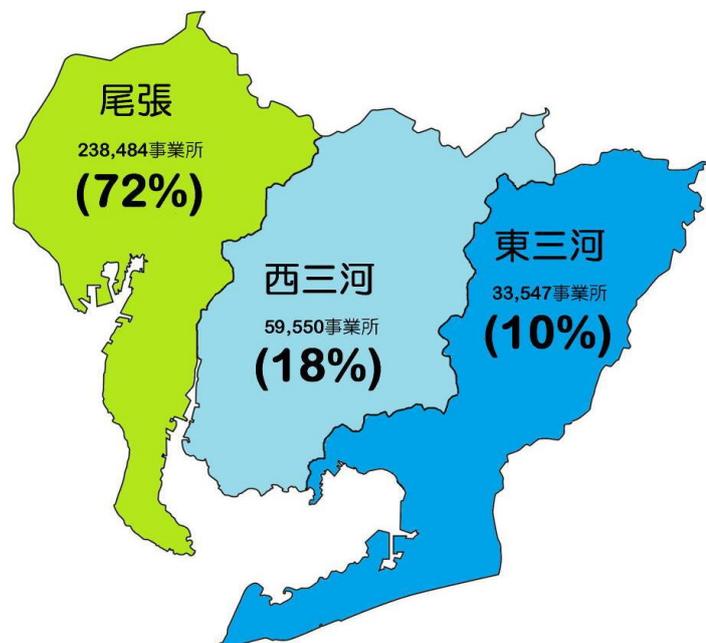
…という結果でした。 ※出典:子どもの生活と学びに関する親子調査

また、20~50歳代の社会人を対象に、[株式会社しんげん]が行った家庭学習に関するアンケート調査では、「学生時代にもっと勉強しておけばよかったと思うか?」の問いに対し、最も多かった回答が「もっと勉強しておけばよかった(72%)」でした。次いで「過不足なくちょうどよい(24%)」、「勉強しなくてもよかった(4%)」という結果が出ています。 ※出典:SHUFUFU

これらは、あくまでひとつのアンケート結果ですが、家庭学習に対する自分のスタンスを振り返るきっかけにいただければと思います。それぞれ目指す進路先によって目標とする学習時間や学習内容は異なりますが、将来の選択肢を増やすためにも、学習に対して後悔のない学生生活を送っていただきたいと考えています。

【電車利用の練習】

就職希望者が要望する進路先の条件として、多くの方が居住地近隣の勤務地を挙げます。視力に不安のある方であれば通勤は切実な問題であり、進路指導部としても重視している項目です。しかし、本校幼児児童生徒の居住域である三河地区については、尾張地区に比べて豊富な企業数があるとは言えません。



左の図は、尾張、西三河、東三河にある各企業数と、その比率を表したのですが、県内の7割以上の事業所が尾張地区にあることが分かります。居住人口の比率を大きく超えて尾張地区に企業が集まっている状況です。

※出典：愛知県経済センサス 事業所に関する集計

そして問題なのは、その事業所数に比例して、三河地区の障がい者求人数も少なくなっていることです。反対に尾張地区は求人数が多いだけでなく、仕事の業種も増えるため、自分に合った条件が見つかる可能性が高くなります。

また交通環境がしっかり整備されている尾張地区中心部への通勤であれば、仮に徒歩やバスを乗り継いで通う地元の企業より、安全で通勤時間が短くなる場合もあるかもしれません。



そのような可能性を考えると、希望する通勤範囲を広げて進路先の選択肢を増やしておくことや、休日等に電車利用の練習をしておくことも、大切な事前の就職活動と言えます。

【いつやるの!?!】

先日、全校の保護者に配布した「全国盲学校 PTA 連合会通信・手をつなごう」の中で、令和5年度のあ-は-き師国家試験についての合格率が掲載されました。そのうち、盲学校生のデータについて抜粋します。

あ-は-き師 国家試験 合格率

	盲学校新卒者	盲学校既卒者
あんまマッサージ指圧師	83.1%	2.8%
はり師	73.6%	14.1%
きゅう師	74.7%	16.7%

「あんまマッサージ指圧師」の盲学校新卒者の合格率は 83.1%、既卒者の合格率は 2.8%。「はり師」の盲学校新卒者の合格率は 73.6%、既卒者の合格率は 14.1%。「きゅう師」の盲学校新卒者の合格率は 74.7%、既卒者の合格率は 16.7% という結果でした。

いずれも新卒者と既卒者に合格率の大きな差がみられますが、盲学校在学生の場合は、教員から常にサポートが受けられることと、同じ目標をもつ仲間が周りにいることで高いモチベーションを保てるのが、この結果に繋がっていると考えられます。

「たとえ在学時に不合格であっても、合格するまで受験し続ければよい」という考え方もあります。しかし、現役から年を経るに従って合格率は落ちていくという厳しい現実があります。このことは、予備校に通う大学浪人生の合格率とは異なり、よほど強い信念がなければ合格は難しくなります。

在学生の強みは、その“勢い”だと考えています。時間的な余裕もなく、焦りや不安も大きいかもしれませんが、そのぶん真剣に取り組む想いは強く、周りのたくさんの応援によって士気も高められます。思いっきり受験勉強に挑戦できるのは学生時代の“今”なのです!!



〔宝島〕

高等部理療科教諭

みなさん、こんにちは。この宝島も初めて DREAM に掲載してから2年が過ぎようとしています。これまでも他の本校教員が自分の進路に関する記事を執筆したことがあると思いますが、ここまで長い期間に渡って掲載したのは初めてのことになると思います。「そろそろ切り上げてほしいな」とお思いの方もいるかもしれませんが、もう少しだけお付き合いいただけることを願います。その分、飽きることがないように努力していきたいと思いますので、よろしく願います。決して、読者を飽きさせないために、偽りの気持ちや文章を書くわけではありませんので、ご了解ください。それでは、高等部普通科の後半をお楽しみください。



13. 仕事って…?

私の実家は、私が小学校4年生の時から自営業を営んでいます。一番最初の原稿で私の実家が陶器産業が盛んだった地域にあったと書きましたが、その影響で我が家も陶器の生産にかかわっていました。ちょうど我が家がこの仕事にかかわり始めたころ、1980年以降は日本の経済もそれまで以上に上向きになっていった時代、いわゆるバブル期に突入していった時期なので、毎日がとにかく忙しく、深夜まで仕事をするのがほとんどでした。そんな中で、当然、私にも仕事を手伝うように声がかかりました。実家の敷地内に作業場があったため、少しでも手が空いているところを見つけられれば、仕事を手伝うように親から呼ばれます。私は中学部のころから仕事を手伝うようになりました。

最初の仕事は、緩衝材の組み立てでした。折れ線のついた厚紙を折って組み立て、セロハンテープで固定して完成です。1つの箱に4つが必要となるため、出荷の数が50箱となれば、少なくともその4倍は必要となります。いろいろな商品を出荷していたため、それぞれの梱包内容は異なりますが、最も多く出荷していた内容を書いてみます。

まず、5枚の取り皿と1枚の大皿、それに5本のフォークがセットになっています。薄紙で包んだ1枚の大皿を箱の底に置き、その上に緩衝材となる厚紙を置きます。さらに、その上に5枚の取り皿をそれぞれ薄紙で包んで、空いた4辺の隙間を緩衝材で埋めます。小皿の上に緩衝材で包んだフォークを載せて、最後に蓋をして、ひもで結束し、箱の表面に傷がつかないように、薄紙で包装します。出来上がった1セットの箱を10セット分大きな段ボールに詰めて、ガムテープでふたをします。これをトラック1車分、ほとんど毎日出荷していました。

我が家では、これらのお皿に模様や縁取りの金のラインを書き込んで、絵付け窯で焼いて、それを梱包していました。他にも5色がセットになったご飯茶碗と箸のセット、急須と湯呑に茶卓とふたがセットになった商品などもありました。扱っている商品が割れものなので緩衝材となる包装は仕方がないと思いますが、「これって過剰包装なんじゃないの?」という印象をもってしまうほど、繰り返しの包装や緩衝材の組み立てが仕事の中に含まれていました。

流れ作業で箱詰めをするため、あらかじめ予定を聞いて、その数だけ準備する必要がありました。作業そのものは単純で難しいわけではないのですが、必要な数量が私の想像を上回る数だったので、それだけでうんざりしました。また固定するテープを必要以上に使わないよう、何度も注意されました。何種類ものお皿やコップの大きさに合わせた緩衝材の組み立てや大きさの異なる段ボールの組み立てに戸惑うこともありましたが、慣れていくことで何とかこなすことができました。しかし、特に夏は暑い作業場で長時間手伝いをすると、早く自由になりたいという気持ちがわいてきました。連日作業が続くと、長時間の拘束や繰り返しの作業に対する

飽きが私を苦しめました。励みになったのは、バイト代と休憩時間でした。

休憩時間は、10時と15時のおやつです。作業場にはラジオが流れていましたが、毎時の時報が気になったり、昼ごはん前になると聞こえてくる「テレホン人生相談」が待ち遠しくなったりしました。バイト代は時給ではなく、その時ほしいと思っていた音楽プレーヤー「WALKMAN」を買ってもらうことになっていました。しかし、両親はこんなことを言います。「実際の作業代は一箱当たり20～30円程度、それを作業にかかわった人数で割れば、一人の取り分は1箱当たり5～6円だ」、「さらに、失敗して材料が使えなくなった場合は、そこからマイナスが生じる」まるで鬼のようだと思っていましたが、「仕事とはそういうもので、お金を稼ぐというのも、そんなに簡単なことではない」とさらに追い打ちをかけられます。それに対して私は、なるべく宿題に時間をかけて手伝う時間を少なくしたり、たまの部活に出かけたときに帰宅時間を遅くしたりするなどして、わずかな抵抗を試みるだけでした。

少しずつ仕事のバリエーションが増えてくると仕事に対する嫌悪感は少し解消されましたが、「次はトラックから荷物を降ろす」、「次は段ボールの組み立て」、それが終わったら「出荷の段ボールの積み込み」など、次から次へと押し寄せてくる仕事にへき易していました。仕事が増えれば、注意されることも増えます。「無駄なく多くの荷物をトラックに積み込むためには、1センチの隙間も無駄にするな」、「人より動きが遅い分、一回に運ぶ荷物の量を増やすなどの工夫をしろ」、「電話を受けたら、数字やひらがなくらいは書けるんだからメモを残せ」などなど、視覚障がい児の親とは思えないようなことも言われました。バイト代の代わりとして買ってほしかったものは手に入れることができましたが、すべての望みがかなえられたわけではありませんでした。こうした中で私は、「仕事って、単純作業の繰り返しなのかな?」という印象が強くなり、「繰り返しの単純作業ではない仕事に就きたいな」と思うようになっていきました。仕事の手伝いは、教員として働くようになるまで続けました。専攻科に入ってからには実技の向上という目的で、作業場の一角で施術するというバリエーションも増えました。陶器はもともと土が原料なので、数量が増える

と大変重くなります。その荷物を運搬することで腰痛に悩まされる人が我が家にも多く出入りしていました。また絵付けの作業では手書きであるにもかかわらず、同じ商品としての品質を保つために仕上がりが一定でなければならないことで、肩こりに悩まされている人もたくさんいました。おかげで私の技術は上達し、将来の開業に対して期待がもてる利点もあったのですが、ここでも私を悩ませるのは繰り返しの仕事に対する嫌悪感でした。1週間ほど前に「肩が楽になった」、「腰が痛くなくなった」と帰っていくのに、1週間たてば「また、肩が凝ってきた」、「この前治った腰が、また痛くなった」と、同じ人が施術に訪れます。「せっかく治したのに」という思いや「技術が低いからこんなことになるの？」などの疑問が浮かんで消えませんが、仕事の種類によってサイクルは異なるものの、繰り返しという点では、どの仕事も変わらないという嫌悪感は共通していました。その頃に読んでいた村上春樹さんの小説からは、自分の生き方を決めるまでの時間は長くて自由に過ごせるというような印象がありました。ドラマなどでは、「自分にしかできない仕事」とか、「こだわりをもって仕事に取り組むことが大切」などがテーマにされているものもあったように思いましたが、私が仕事に対して感じていたのはそれとは違うものでした。

14. 頑張る方向が少し違うんじゃない？

学校ではめまぐるしく周囲が騒がしくなっていく中で、私も一矢報いたいといった気持ちを持ち続けていました。といっても、普通科も後半にさしかかろうとしている2年生の9月になっても、進路を決めかねていました。しかし、時間は流れていきます。私がその中でとりあえず取り組んでみたのは、目の前にあることを頑張るというものでした。身近にある生徒会の運営とか、部活動とか、体育祭や文化祭などの計画でした。このように考えたのは、大学進学を目指した先輩や、アメリカに留学している



友人たちに対して、先生方の期待が並々ならぬものになっていると感じていたからです。それに負けないパフォーマンスとして、あまりやりたがる人がいない生徒会活動や行事の計画を積極的な態度で取り組めば、評価されると考えたからです。



進路を決定した人たちからは、「受験で忙しくて生徒会なんかやってられないよ」とか、「体育祭や文化祭なんて、暇な人がやればいいんじゃないの」と、嫌な感じの言葉を返されていました。しかしその状況に対して、「受験は大変だから」とか、「必死に頑張っているんだねえ」などと、擁護するような先生もいらっしゃいました。少し前に流行った表現で例えると、大学や他の学校に進学する生徒は勝ち組、そのまま専攻科に進学する生徒は負け組といった様子に私は感じていました。ちょうど私たちの3学年上、つまり昨年度退職された長崎先生たちの学年では、多くの人が大学や他の学校を受験しました。これに対してその下の学年、つまり私たちの2学年上の先輩たちは、全員が名古屋盲学校の専攻科に進学しました。この状況について、周囲では様々な反応がありました。中でも私の耳を強く刺激したのは、やはり勝ち組に対する評価でした。冷静に捉えることができる現在ならば「勝ち負け」なんて言う表現が当てはまらないと判断もできますが、当時の私たちにとっては常に付きまとう問題でした。

「普通じゃだめだ、現状の中でも注目されるようなことをしなくては！」これが私の心に宿った思いでした。さらに私に火をつけたのは、ときどきアメリカから送られてくる手紙です。「レスリングの大会でニューヨークに出かけた」、「ドイツ人の友人とホームステイしている」、「ダンスパーティーに向けて練習中です」などの内容を読むたびに、「ここ日本にいても成長してやるんだ」と「普通じゃだめだ」という思いに拍車がかかるのでした。文化祭では舞台発表やコーナーも評価され、周囲からは「よかったよ」とか「頑張ったね」という声をかけられたり、体育祭では「今まで

「普通じゃだめだ、現状の中でも注目されるようなことをしなくては！」これが私の心に宿った思いでした。さらに私に火をつけたのは、ときどきアメリカから送られてくる手紙です。「レスリングの大会でニューヨークに出かけた」、「ドイツ人の友人とホームステイしている」、「ダンスパーティーに向けて練習中です」などの内容を読むたびに、「ここ日本にいても成長してやるんだ」と「普通じゃだめだ」という思いに拍車がかかるのでした。文化祭では舞台発表やコーナーも評価され、周囲からは「よかったよ」とか「頑張ったね」という声をかけられたり、体育祭では「今まで

にない盛り上がりだったよ」などの感想が寄せられたりしました。充実感、満足感などはそれなりに感じるのですが、勝ち組になれたという実感はもてませんでした。



そんな中で、やっと「こんな仕事がしたい」と思えるものがでてきました。それは、動物園の飼育係でした。読者の方からは、

「何それ？」という声が聞こえてきそうです。文化祭で「ゾウ列車がやってきた」の合唱を知ったことをきっかけに、クラスで行う劇にも戦争や動物園の飼育係といった要素を盛り込みました。脚本を完成させるに当たって、東山動物園に出かけたり、図鑑を調べたりもしました。また、子どもの頃に見覚えのあるものランキングを前書していますが、上位には入っていない動物たちの姿があります。これに直接触れてみたい、飼育係であればこれが可能になるだろうとも考えていました。これに加えて、大学や留学する人たちが評価されていることに対して、一矢報いることができるという思いもありました。ある程度、現実性をもたせるために、猛獣の飼育係



は無理でも、草食動物や小動物の係、売店の仕事、事務であればできるのではないかと、取り繕ったような話題も加えて担任の先生に打ち明けました。その担任の先生とは、毎日学校でサッカーの練習相手をしてくださった数学の先生です。

ここに書くまでもなく、担任の先生の態度は「あきれた」といった様子でした。それでも、「なぜそう考えたのか」、「それをするために今後どうするつもりなのか」、「自分一人で考えたことなのか」など、私を諭すように指導してくださいました。しかし、周囲と自分には差ができていないのではないか、先生方は優秀な生徒にしか興味がないのではないかといった、私の本音を打ち明けることはできませんでした。

た。とはいえ、飼育係に対する興味をもっていたのも事実だったので、東山動物園の園長に手紙を書いて、飼育係になりたい旨を伝えました。やがてお返事をいただくのですが、当然ながら無理という内容でした。

ここまで長い文章を読んでくださった方の中にも、私の未熟な点にお気づきの方もいらっしゃると思います。私は普通科の段階にありながら、自分の状態を正確に理解できていませんでした。視覚に障がいがあれば、現実としてできるとできないことがあり、それは夢や努力では何とかできるものではないことを分かっていませんでした。趣味やよほどの生産性があるものと認められれば可能になる職業もあるのかもしれませんが、自分の安全を確保し、給料に見合うだけの生産性があり、経済的な自立を果たして、一生続けていける仕事を見極める力はありませんでした。でも一方では、そんな自分自身を受け入れることができなかつたことも事実です。「見えないことを自分の言い訳にしたくない」、「見えないことをできないことの理由にされたくない」、「努力と熱意で見えないハンディは克服できる」などの思いは、自分の心に必ず抱えてきた気持ちでした。私たち視覚障がい者が



これらの課題を適切な形で克服するには、あらゆる方面からの説明や支援、自身の成長にかかる時間、言葉での理解ではなく実感できる体験などが必要になると思います。しかし、それを正確に理解するためには、家族や学校の先生方などの周囲の助けが非常に大切で、どの部分が欠けていてもうまくいか

ないのだと思います。仮にすべての条件が整っていたとしても、素直に受け止めて冷静な判断力をつけるのは相当難しいことだと思います。私の迷走はまだまだ続きます。苦しかった時代でもありますが、この時間があったからこそ悔いのない人生を過ごすことができていると思います。さて、今回はどんなエピソードが待っているのでしょうか。